
形容詞の二つの統語機能

言語学テキストの解釈的観点から

金 銀 珠

1. はじめに

構文上の形容詞の機能に文の述語成分になる叙述機能と名詞を修飾する成分になる名詞修飾機能の二つを挙げることができる。この二つの機能について、一般に、現代日本語文法論においては形容詞の本質的機能は名詞修飾にあるという見方が広く見受けられる。本稿では、この見方の形成過程を含めて形容詞の二つの機能に関する学説上の諸問題を多角的に考察し、形容詞の二つの機能を文法上どのように考えた方が合理的であるのかについて考えようとする。考察は通言語学的な広い視点に立ち、日本語学、英語学、ラテン語文法、言語類型論のテキストを対象とし、形容詞の二つの機能に関する学説を外観していく。

2. 形容詞の機能に関する二つの見方

- (1) 青い空
- (2) 空が青い。

現代日本語文法論においては、形容詞¹⁾の統語的機能に関して二つの見方が存在する。一つは、形容詞の統語的機能の本質は(1)のような名詞の前で名詞を修飾する機能（以下、名詞修飾機能と略）にあるとみるもので、もう一つは日本語形容詞の特質は(2)のような述語成分になる機能（以下、叙述機能と略）にあるとみるものである。本節では形容詞に関するこの二つの見方の内容を確認し、これらの見方の根拠になっているものについて検討する。

2.1 日本語学における形容詞

まず、形容詞の統語的本質を名詞修飾機能にあるとみる論についてみる。

現代日本語文法論においては、慣習として「連体修飾語」が時に「形容詞的修飾語」と呼ばれることがある。『日本語文法大辞典』(2001)では「形容詞的修飾語」の欄で「連体修飾語の別称」(p. 229)と説明する。ここで形容詞概念と連体概念とが結びついたのは、『日本語文法大辞典』(2001)が続けて、「欧米語の文法で形容詞は名詞を修飾するから、この名称が生まれたが」(p. 229)と述べているように、西洋語においては、形容詞は名詞を修飾するものである、という理解がまず基にある。また、「連体」は、東条義門『和語説略図』(1833)以来の日本の伝統的な国語学における「連体言」の「体言につづく言」という意味を、名詞修飾機能に対応させたものである。すなわち、形容詞と連体概念の結びつきは、英文法の形容詞解釈と伝統的な国語学における連体の二つの理解が合流して形成されたものである。英文法の形容詞が名詞を修飾するものであるという認識は、後述のようにbe動詞の機能についての解釈から生まれたものである。

形容詞の機能的本質を言語哲学の原理論的な立場から論じた川端善明(1958、1959)は、名詞修飾機能を形容詞の本質として論じた古典的なものである。川端(1958、1959)の論において、形容詞は属性概念として本来モノに備わっている性質を表し、モノと一体になった全体として、モノとしての判断が本来の領域であり、それが連体修飾の構文環境であるとされる。名詞修飾が本来の機能である形容詞が叙述用法に立つことができるのは、「形容詞の機能の中に未分化的に含まれている“存在”規定」(1959: 34)によるものであるとしている。これは、存在の意味をもつ「ある」が形容詞の中に未分化的に含まれており、形容詞自身が述語になるわけではなく、「ある」の力によって述語になることができる、とみるものである。尾上圭介(1999)は、川端の論を受け継ぎ、形容詞そのものは本質的には叙述用法に立てないものとし、次のように論じている。

「黒い」「かわいい」(「ペンギンは黒い」「ペンギンがかわいい」から：筆者注)というのは存在様態(情態)の名前であるに過ぎず、その形容詞“述語”の裏面にかくれている、意味としての「ある」そのものが本質的な意味での述語なのだと考えなければならない。このことは The penguin is pretty. の述語が pretty ではなく、存在の意味を表す be 動詞であることを考えれば、容易に納得できであろう。このように考えてくると、名詞と同様に、本質的な意味では形容詞も述語に立つものではないということになる。(下線筆者、1999: 112)

上記引用文で見ると、尾上(1999)では、英語の形容詞述語文が名詞述語文と同様

に、be 動詞の介在なしに述語として機能することができないことから、形容詞は名詞と同様に本質的には述語に立てないものと考えている。また、それを日本語形容詞に対応させて、日本語形容詞も本質的には述語に立つことができないもので、形容詞の構文上の機能の本質は名詞修飾にあると論じている²⁾。上記引用文から、日本語形容詞の機能の本質が名詞修飾機能にあるとみる考え方には、英語の形容詞述語文における be 動詞の役割と、英語の形容詞が名詞に近い性質をもつという、英語形容詞そのものについての理解が影響していることが窺える。純粹に日本語のみを対象とした観察では、日本語形容詞は「空が青い。」「色が黒い。」のように単独で述語になることが可能であるので、形容詞そのものが述語になれないというような理解に直接には結びつかない。川端（1958、1959）、尾上（1999）の形容詞論は、原理主義的な立場から考えられたもので、日本語に限るのではなく、言語における形容詞そのものの本質として考えられている。

形容詞の本質的な機能が名詞修飾用法にあるとみる論は、日本語文法論において、しばしば見かけるものである。例えば、仁田義雄（1998）は、形容詞の本領が名詞修飾にあるという立場にたち、小説資料を対象とし、現代日本語における形容詞の用法を叙述用法と名詞修飾用法とに分け、その使用頻度を調べた結果、名詞修飾用法が述語になる用法より2倍近く多く見られることから、「形容詞の本領は、やはり名詞を修飾限定する装定用法に在る」（1998：34）と述べている³⁾。

このように日本語形容詞の本質的な機能は名詞修飾にあると見なす考え方がある一方で、日本語形容詞の特徴は述語になる叙述機能にあると考える論もある。このような論は、『国語学辞典』（1955）、『日本文法事典』（1981）、『日本語文法大辞典』（2001）等に記述されている一般的な考え方である。この考え方では、英語などの西洋語の形容詞と違い、日本語の形容詞には文を結ぶ力（もしくは、文における統合力）があることが重要視される。『日本文法事典』（1981）の「形容詞」の説明を見よう。

日本語の形容詞が、西洋語の形容詞と異なることは、明治以降すでに多くの人によって指摘されている。例えば、英語の adjective の場合、Mary is beautiful. のように、be 動詞の助けを借りて初めて述語となることができるのに対し、日本語の場合は、「彼女は美しい。」のように単独で述語となることができる、という違いがある。すなわち、adjective は、名詞を修飾するはたらきが中心で、日本語の形容詞とは違って叙述の力がなく、その意味で名詞に近いといえる。大槻文彦は、こうした違いを明確にするために、日本語の場合は形容詞といわずに、形容動詞と呼ぶべきだ、主張した。（下線筆者、1981：162-163）

上記下線部に見るように、日本語形容詞が英語の形容詞と異なる点は、be 動詞を介在せず述語になることができる「叙述の力」をもっていることにあるとされる。叙述の

力とは、be 動詞の力である。日本語の形容詞は be 動詞の力を自身の中にもっており、動詞と同様にそれ自体で述語になることができる、とみるのである。これは、日本の国語学における伝統文法の中で、形容詞が動詞とともに、まず活用することにおいて用言の一類として取り扱われ、述語になることを重視する立場が背景としてある⁴⁾。一方、英語の形容詞は be 動詞の助けによって述語になることから、叙述用法は本領ではなく、動詞等の助けなしにそれ自身で現れることができる、「a beautiful girl」のような名詞修飾機能に本領があるとされる⁵⁾。

以上のように、現代日本語文法論においては、形容詞の統語機能に関して、日本語形容詞の本質を名詞修飾にあるとみる立場と、特定の繫辞の介在なしにそれ自体で述語として機能する「叙述の力」をもつことが日本語形容詞の特徴であるとする立場の、二つの見方が存在する。この二つの論は排他的な関係にあるのではなく、両者ともにそれぞれ受け入れられている。日本語形容詞の本質は名詞修飾機能にあるが、その特徴は叙述機能にあるとみるのである。しかし、その論理の内実は相反するものである。なぜなら、前者は日本語形容詞を英語の形容詞と同じく、それ自体に be 動詞の機能を備えていないものとして捉えていることから成立し、後者は、日本語形容詞が英語の形容詞と違い、be 動詞の機能を備えているという、相反する内容を基底に成立しているからである。また、前者は日本語形容詞を英語の形容詞と同様に名詞に近いものとして捉えているが、後者は動詞に近いものとして捉えている。

2.2 be 動詞の統語機能

前節でみたように日本語文法論で考えられている形容詞観の二つは、どちらも be 動詞の役割の解釈問題が関与している。以下では、形容詞の機能を論じる際にとかく問題になる be 動詞の統語機能について簡単に検討する。

前節では英語の形容詞が、be 動詞の介在なしで名詞修飾成分になることからその本質が名詞修飾機能にあると見られていた。一方、be 動詞の介在によって述語成分になることから、英語の形容詞には文を結ぶ力はないとされた。しかし、be 動詞は、文を結ぶために、あるいは、文における統合力のために存在するのだろうか。

まず、be 動詞を文を結ぶ力（もしくは、主語と述語を結ぶ統合力）と同等に対応させて考えるのは、言語類型論における調査報告からすると、必ずしも妥当ではないということを確認しておきたい。Lyons (1968)、Dik (1980)、Wetzer (1996) などでは、「Mary beautiful. (Mary is beautiful.)」のように、be 動詞がなく、主語名詞と形容詞の二項を並置するだけで文を作ることが言語的に多く見られる現象であることが報告されている。中国語がそうであるし、ロシア語は現在時制では be 動詞に該当するようなものが現れず、過去やムードを表示する場合に現れる。このような、名詞と形容詞を並べるだけで文になる場合では、文であることの保証は、二つの要素を並べている構造自体に委ねら

れているといえる。また、英語の場合でも「He makes me happy.」における「me」と「happy」の間の結合力は be 動詞の力によるのではなく、文型という構造に委ねられているものである。仮に、言語における形容詞がそれ自体では叙述機能にたつことが不可能で、特定の be 動詞に該当する形式がある場合は、その特定形式の力によって初めて述語になることができるとすると、例えばロシア語のように主語名詞句と形容詞の二項を並置するだけで文として機能することはあり得ないはずである。したがって、文としての統合力を be 動詞を使って示すことがあるとしても、その逆の、be 動詞がすなわち、文を結ぶ力、文における統合力とは言えず、このような考え方は、合理的な考え方ではない。

また、歴史的にみて印欧語の形容詞文における be 動詞は文を結ぶためではなく、時制やムードなどを表すために発達したものであるとされる。Vendryes (1921)、Benveniste (1966)、Lyons (1968) などによると、印欧語解釈の伝統的な立場において、be 動詞は元来「存在する、ある」を表すだけの動詞であった。これが名詞・形容詞述語文のコピュラ動詞へと発展し、(3)のようなテンスやムード、さらに、人称といった情報をもり込むことが可能になったとみる。

- (3) a. He is strong.
 b. You were strong.
 c. He will be strong.
 d. Be strong!
- (4) a. 彼は強い。
 b. 彼は強かった。
 c. 強かろう。
 d. 強くあれ。

be 動詞は、構文的にみれば、時制やムードなどを表すために発達したものである。このようなことから、be 動詞の役割は、文を結ぶことより、まず、形容詞文に時制やムードを盛り込むことにある、とみた方が妥当であろうと考えられる。さらに、このような be 動詞の統語機能は (4b, c, d) で見るように日本語の形容詞が単独では過去時制やムードを表すことができず、「強く+あった」「強く+あろう」「強く+あれ」のように存在動詞「ある」と結合することによって示される現象とパラレルである。

3. 英文法における形容詞

本節では、英文法において形容詞の機能はどのように説明されてきたのかを概観する。

3.1 ラテン文法からの脱却

周知のように西洋文法における形容詞は、ラテン語文法の影響から長らく名詞の下位一種として取り扱われていた。adjective という用語は、元来、ラテン語の *adjectivum* に由来し、付け加えられたものという意味をもっている⁶⁾。ラテン語文法における形容詞 *adjectivum* が名詞の下位一種として扱われていた理由について、まず、みておく。

ラテン語では、形容詞は名詞とともに一つの品詞 *nomen* (名詞) に属し、名詞は *nomen substantivum* (実体名詞、名詞) と *nomen adjectivum* (属性名詞、形容詞) とに下位分類される。形容詞が名詞に属するのは、形容詞の性、数、格の語形変化の型が名詞と同形式だったためである。(以下(5)(6)例: *bonus*—よい・いい、*filius*—息子、*est* / *sunt*—*esse* (である) の変化形、(片岡孝三郎 1982 参照))

- (5) a. *filius bonus* よい息子が (男性・単数・主格)
 b. *filij boni* よい息子たちが (男性・複数・主格)
- (6) a. *filius bonus (est)* 息子がよい (男性・単数・主格)
 b. *filij boni (sunt)* 息子たちがよい (男性・複数・主格)

上記の例で見ると、(5a, b) の名詞修飾用法と、(6a, b) の *be* 動詞に相当する *esse* 動詞とともに述語として機能する用法、いずれの場合もそれと関わる名詞と性・数・格を一致させているが、その形態上の類似に注目して欲しい。(6a, b) の叙述用法に介在される *esse* 動詞は省略されることがあったようなので、括弧の中に入れておいた。このような曲用における形態的な類似から、ラテン語の形容詞は名詞の下位一種となり、実体名詞に付け加えられた (*adjectus*) という意味で *adjectivum* と言われる。古代ラテン語の文法家にとっては、曲用形式が同じ名詞と形容詞の間を区別する意識がなかったであろう。ここで、*adjectivum* が「付加された」という意味をもつのは、実体名詞と性・数・格が一致するという形態的な側面の類似によること、この形態的な類似は、名詞修飾用法と叙述用法の両方に見られることを確認しておきたい。「付加」という術語は、形容詞の名詞修飾機能に解釈されがちであるが、純粹に形態的な立場からみると叙述用法においても主語名詞と性・数・格を一致させ、主語名詞に「付加」されていたのである⁷⁾⁸⁾。

ただし、形容詞と名詞はともに「名前」という意味をもつ「*nomen*」に属し、述語としての機能は「述べる語」という意味をもつ動詞「*verbum*」の主な機能であると考えられていたので、ラテン語文法家にとっては、形容詞は名詞修飾機能の方により重きが置かれていたと考えられる。一方、ラテン語文法家とは違い、プラトンやアリストテレスなどは、形容詞の主な機能が文の述部を形成する点に着目して動詞の一部と見なしており、論理的立場に立つ文法では、この分類法がとられているという(『現代言語学

辞典』1988:11)。

ラテン語文法は、中世や近世のヨーロッパの諸言語における文法範疇にも利用されたが (Gneuss 1996)、形容詞もこれに洩れず、ラテン語文法の影響から、長い間、名詞の下位一種とされた。文法家が名詞と形容詞との違いを認識しはじめたのは、13世紀頃からであるとされる (Michael 1970, Dixon 2004)。それは、形容詞が名詞と「性」の曲用が異なることの認識からである。すなわち、ラテン語の名詞は女性、男性、中性の3性の中の一つの性を固有にもっているが、形容詞は修飾する名詞に一致させるため、どのような性にもなれるという独特の性質をもっているのである。その後、形容詞が名詞と違い、比較級と最上級をもつこと、単数・複数の形態的区別がないことなども認識されるようになった。しかし、いずれにしても、形容詞がラテン語文法の影響から脱し、英文法で独立の品詞として確実に見なされるのは、Michael (1970) によると、18世紀後期に入ってからである。

3.2 品詞論の形容詞

現代英文法では形容詞を名詞から独立した語クラスとして扱っている。本節では、英文法の品詞論における形容詞規定を概観し、形容詞の名詞修飾機能と叙述機能がどのように扱われているのかみることにする。

安井稔 (1976) を参考にすると、英語の形容詞は、次のように、名詞修飾機能のみをもつもの、叙述機能のみをもつもの、両方可能なもの3種がある。

- (7) a. We sat there in utter silence.
 b. His upper arms were like tree trunks. (名詞修飾機能のみ)
- (8) a. The girl is alive.
 b. My mother lay awake worrying all night. (叙述機能のみ)
- (9) a. a big tree
 b. These jeans are too big. (両方可能)

この3種のうち、英文法の中心的な形容詞は(9)のような、叙述と名詞修飾の両方に立つことが可能なものである。これは、現代英文法の形容詞の認定法をみればわかる。英文法の形容詞は安井 (1976) で述べているように一定の基準を立てて定義を与えている文法家はほとんど見られず、いわゆる用法の項目で、形容詞を説明している。それらは、①述語として用いられる、②名詞修飾の修飾要素として用いられる、③ -er、-est の比較級・最上級の特徴をもつもの、という形態・統語的特徴をもつものに要約することができる (Jespersen 1933, Zandvoort 1960, Long 1961, Biber et al. 1999等)。このように叙述機能と名詞修飾機能の両方が形容詞の用法に挙げられているのは、典型的な形容詞を(9)

のような叙述と名詞修飾の両方に立つことが可能なものとみているためである。一例に、Biber et al. (1999) では、英語の典型的な形容詞は限定と叙述の両方が可能なものにあり、どちらか一方のみのはより周遍的なものと説明している (p. 505-507)。このように、形容詞の叙述機能は現代英文法における形容詞規定の主要な部分を成している。これに対して、英文法の名詞の認定法には述語になる機能は挙げられない。もちろん、名詞も構文的な位置によって叙述用法にたつが、形容詞には叙述用法の規定が入っており、名詞にはそれがないということは、叙述用法に対する重要度が違うことを意味している。

それではなぜ、形容詞の語クラスの規定に叙述用法が入り込んだのだろうか。これには、おそらく、形容詞の比較級概念と関わりがあるものと思われる。19世紀に米国で流布した英文法書で Pinneo (1854)、Brown (1883)、Swinton (1884)、Quackenbos (1885) 等を見ると、形容詞の用例は「a good thing」「a small insect」のような名詞修飾用法が中心になっている。19世紀のこれらの文法書で adjective が名詞とは独立の語クラスとして扱われてはいるが、Pinneo (1854) が「An ADJECTIVE is a word that is used to qualify a noun or pronoun.」(p. 15) のように述べているように、adjective の規定は、まだ伝統的な名詞修飾機能が中心で「名詞への付加」との内容が含まれている。その所属語彙は今日 adjective に所属する語類以外にも、「two boys」「first time」のような数詞、「this boy」「other boy」のような代名詞、「a girl」「the girl」のような冠詞が名詞を修飾するものも adjective として扱われている。名詞との性・数・格の一致が消滅した英語の形容詞において、「付加」(qualify または modify) は名詞修飾機能の方により傾けられて解釈されていたと考えられる⁹⁾。

このような状況の中で adjective の叙述用法をどのように扱うかが問題になるが、上記のように品詞規定では名詞修飾機能が中心になっており、叙述機能は「Syntax」という項目で簡略に紹介されているにすぎない。ただし、形容詞の比較級の説明に関する限り、みな「He is wiser and happier than I.」「Edward is taller than James.」のような叙述用法の例で示されている。このように比較級に限り叙述用法の例で示されるのは、比較級が「A wiser man than me is him.」「A taller man than James is Edward.」のような名詞修飾用法で表れにくいということが原因としてあるのではないかと考えられる。すなわち、形容詞が前置修飾する名詞句が than 以下を従え長くなっているため、この場合は上記のように叙述用法として用いた方が自然である。通常の形容詞には選択される要素として必要な項は属性や状態を所有する一つの項があればよいが、比較級は比較の対象が要求され基本的に二つの項を必要とするのである。

また、前節のように西洋語の形容詞がラテン語文法から離れて名詞から独立した語クラスと認定されるようになったのは、名詞とは違い固有の性をもたず、単数・複数の形態的区別がないこと、また比較級・最上級をもつという形態統語的な認識からである。この中で、名詞だけでなく他の品詞とも違う英語の形容詞の特徴は形態的に比較級・最

上級をもつという点である。現代でも Dixon (2004) のように比較という操作は形容詞という語類に本質的に備わっている性質であるとみる論もある。

4. 叙述機能と名詞修飾機能

以上、日本語学、英語学、ラテン語文法の学説上において形容詞の機能がどのように扱われてきたのかを検討してきた。本節では、実際、形容詞がもつ名詞修飾機能と叙述機能の中でどちらがより本質的であるのかを、英語および日本語の形容詞を対象として考えてみたい。

まず、言語的事実として形容詞は、叙述用法と名詞修飾用法の両方に使用されているので¹⁰⁾、どちらか一方の機能が本質的であるためには、本質的ではない機能の本質的機能から引き出すことができる、ということが前提になる。そこで、一方の機能を本質的とみなし、残り一方を本質的機能から抽出する、という観点から考察していくことにする。この観点からはすでに町田健 (1997) で概略的な検討がなされているが、学史史を含んだより包括的な観点からアプローチしてみる。

まず、名詞修飾機能を形容詞の本質的機能とみなし、叙述用法を名詞修飾用法から引き出してみよう。この方法では、叙述用法にたつ形容詞は、(10a)に示しているように被修飾名詞が省略されていると考える方法を取る。例えば、名詞修飾機能を中心に置く先述の19世紀の米国文法書で Quackenbos (1885) をみると、叙述用法で出されている比較級の用例「The elephant is the largest of beasts」の下線部は、「largest beast of beasts」のように、被修飾名詞が省略されている形を想定している。また、1960年代後半の Montague (1970) の理論でも同様の考え方が示されている。

- (10) a. N (be) A (ϕ)
 b. This dog is clever (ϕ).
 c. この犬はかしこい (ϕ). (N: Noun, A: Adjective, ϕ : 省略名詞句)

この方法で、まず、問題になるのは、叙述機能しかもたない語群の説明である。例(8)でみたように、英語の形容詞には「The girl is alive.」「My mother lay awake worrying all night.」の下線部の語のように叙述用法にしか使用されない語群がある。これらは名詞修飾用法では用いられないため、そもそも「*alive (girl)」「*awake (mother)」のような手順を考えることができない。日本語でも「多い」「少ない」「遠い」「近い」のような語は、通常は、「多い (人)」「少ない (人)」「遠い (家)」「近い (学校)」のような名詞修飾用法が制限されることが知られている¹¹⁾。

次に、日本語の場合、形容詞は叙述用法で過去やムードを表す形式を伴って現れるこ

とがある。しかし、この場合、名詞修飾用法から叙述用法を引き出すことは困難である。例えば、過去形式を伴った叙述用法(11b)に対応する名詞修飾表現は「激しかった雨 (が降った)」であるが、このような表現は成立せず、(11a)のように「激しい雨が降った」で現在時制形式で現れる¹²⁾。同様に、日本語の形容詞には(12b)のようなモダリティ形式を伴う語類があるが、モダリティ形式を伴った(12a)の「よかろう人」のような表現は成立しない。形容詞の叙述用法が時制やムードを伴う場合、通常は名詞修飾用法から叙述用法を抽出することは困難である。

- (11) a. 激しい雨が降った。
 b. 雨が激しかった。
- (12) a. よかろう人
 b. この人がよかろう。

また、名詞修飾機能を本質的とみた場合、叙述用法の形容詞に被修飾名詞が省略されていると考える、この考え方自体の問題点が、Kamp (1975) によって指摘されている。Montague (1970) の理論は前記(10b)のように形容詞の叙述用法は名詞修飾用法の被修飾名詞を省略したものであるとされるが、この理論では、(10b)の「clever ϕ 」は「 ϕ 」が省略されていると考えるため、This dog is a clever dog とも This dog is a clever animal とも This dog is a clever being とも分析され得る。Kamp (1975) では、このように考えると、どのような名詞句が補充されるかは、文自体では決められず、具体的なコンテキストが与えられない限り、文の意味はあいまいになるとしている (p. 123)。つまり、発話状況の中でしか文の統語上の意味が決められないことの問題点を指摘しているのである。(10c)の日本語の場合も同様に、「この犬はかしい犬だ／動物だ／生き物だ」のように解釈され得るあいまいな意味の文になる。町田 (1997) では、形容詞の意味について、Kamp (1975) と同様のことを述べながら、「本質的には意味論の射程内にあるべき発話の状況が、形容詞を含む場合には、文の統辞構造のレベルですでに重要なものとして関与する」(p. 250) とし、これは、このような考え方の重大な問題点になると言及している。つまり、文の意味が具体的なコンテキストの中でしか決められないのならば、形容詞文の場合は統語論の独立性が担保されない、と論じているのである。

次に、叙述機能を本質的機能とみなし、名詞修飾機能を叙述機能から抽出してみよう。この方法では、(13)でみるように生成文法で考えられているような同一名詞句消去法という手順をとることになる。

- (13) a. [N (be) A] N → AN
 b. [~~The~~ sky is blue.] sky → blue sky
 c. [空が青い。] 空 → 青い空

この方法でも、まず、問題になるのは、名詞修飾機能しかもたない語群の説明である。前記(7)の「We sat there in utter silence.」「His upper arms were like tree trunks.」のような名詞修飾用法しかもたない語群は、「*silence is utter.」「*arms is upper.」のような叙述用法を想定することができない。次に、日本語の場合は、(11a, b)、(12a, b)でみたように、形容詞は叙述用法で時制やムードを表す形式を伴う場合があるが、名詞修飾表現では通常、時制やムードを表す形式は現れないため、叙述用法から名詞修飾用法を派生させることはできない。

また、同じ形容詞でも、叙述用法と名詞修飾用法とでは、意味の違いが生じる場合がある。

- (14) a. The stars are visible.
 b. the stars visible
 c. the visible stars
- (15) a. 星が青い。
 b. 星は青い。
 c. 青い星

まず、英語の場合、叙述用法の(14a)の意味はあいまいで、「星がある特定の時間において見える」とも「星の特性として特定の時間に関係なく見える」とも解釈され得る。これに対し、名詞を後置修飾している(14b)は「曇りの日に星がある特定の時間において見える状況にある」のような意味で、名詞を前置修飾している(14c)は「星の特性として特定の時間に関係なく見える」ことを表しており、両者にあいまい性はない(Bolinger 1967)。このように叙述用法であいまいであった意味が名詞修飾用法ではあいまい性がなくなる場合、何らかの説明の措置を設けなければならない。日本語の場合も、(15a)は星が青い一時的な状態を表すことができ、(15b)は星固有の属性として青い状態を表すことができる。これに対し、(15c)は、特定の星の属性を表している。日本語の場合、叙述用法で助詞が担っていた意味を名詞修飾の場合どのように再現するのかが問題になる。

このように、形容詞の統語機能の一方を本質的機能とし、他方をそこから派生させることは、実際は、何らかの措置を設けないかぎり、困難である。これは、両者がそもそも本質的に異なる機能を果たしているからである。

- (16) a. 黒い服
b. その服は黒い。

簡単にいえば、名詞修飾用法の(16a)は全体としてモノであり、叙述用法の(16b)は性質である。(16a)は種の中の特定の類を表すもので、被修飾語によってモノに内在する属性のうち、一つを引き出して、下位の要素として仕立てるものであり、必然的に他の属性をもつ下位要素——「青い服」「白い服」など——と区別されることになる(沢田奈保子 1992参照)。しかし、(16b)は、主語名詞「その服」という特定の指示対象の性質を述べているのみである。Bolinger (1967) では、形容詞の名詞修飾機能と叙述機能の違いについて、形容詞の名詞修飾用法が「事物の特徴づけ」(Characterization) が本来の意味機能であること、また、種の中の特定の類についての言及という、叙述用法には適さない機能をもつこと、叙述用法と名詞修飾用法とでは、意味の違う語が多数存在することなどが示されている。

単純に考えると、名詞修飾機能と叙述機能のどちらを中心にみるのかはそれぞれの考え方によるもので、どちらでも良さそうであるが、そのような単純な問題ではなく、名詞修飾機能と叙述機能の役割は本質的に異なるものであるといえるのである。

5. 言語類型論における形容詞

形容詞の二つの機能の中でどちらがより本質的かという議論は、合理的な説明に結び付かないことが、以上の考察より、明らかである。そもそも、形容詞に関するこのような議論は、形容詞が名詞と動詞の両方の性質をもつ語群であることが一因としてある。以下では、言語類型論における形容詞論を概観し、通言語的にみた場合の形容詞の性質について検討する。

Givón (1970, 1984)、Wetzer (1996)、Stassen (1997)、Dixon (1977, 2004) 等の言語類型論における形容詞研究の成果によると、世界の言語における形容詞は、固有の文法的特質をもつことはほとんど見られず、名詞か動詞のいずれかに類似する形態・統語的特徴を見せることが多いとされる。名詞と形態的、統語的振る舞いが共通するものを「名詞型形容詞」、動詞と共通するものを「動詞型形容詞」と呼ぶことにする。

ある特定言語の形容詞が名詞型形容詞であるか動詞型形容詞であるかを定める一般的な尺度は、述語成分として機能する際の振る舞い方であるとされる (Stassen 1997: 31)。例えば、英語の形容詞述語文は名詞と同様、be 動詞を介在させ、述語句の主要成分となるが、日本語の形容詞は、動詞述語文と同様に、特別の形式を介在させることなく、述語成分になる。英語の形容詞は名詞型形容詞、日本語の形容詞は動詞型形容詞である。しかし、英語の形容詞が名詞型であり、日本語の形容詞が動詞型であることは、英語の

形容詞が名詞で、日本語の形容詞が動詞である、ということの意味するのではない。例えば、日本語形容詞は動詞型形容詞であるが、基本的な活用と語彙的な派生、統語的な性質の諸方面で動詞とは異なる振る舞いを見せる¹³⁾。すなわち、日本語形容詞は、基本的な活用で動詞がもつ命令形、勧誘形をもたない。また、動詞はアスペクト形式、やりもらい形式等と結合するが、形容詞は結合できない。動詞（他動詞）は「を」格を取るが、形容詞は取らない。動詞は連用形で広く名詞に派生するが、形容詞は「多く」「近く」のようないくつかの語に限られる。同様に、英語の形容詞は名詞型形容詞であるが、名詞とは違い、比較級・最上級の用法をもち、冠詞が前に来ることがない。また、単数・複数の区別表示がない。このように、名詞型形容詞か動詞型形容詞かに関わらず、形容詞は、動詞や名詞の語クラスと統語的、形態的振る舞いが完全に一致することはない。Stassen (1997: 33) では、形容詞のこの性質を次のように述べている。

In short, whatever their affiliation is, predicative adjectives will usually not belong to the core members of the category with which they align themselves. In the typical case, they will be ‘peripheral’ to that category, showing an orientation towards it without being completely incorporated in it.

形容詞という範疇を立てるかどうか、名詞もしくは動詞の下位範疇にするかどうかの問題とは別に¹⁴⁾、類型論的にみると形容詞は名詞や動詞がもつ性質の中核の部分を共有することはなく、名詞や動詞の周辺的な部分に位置する性質をもつものとして典型的に現れるというのである。

結局、日本語でも英語でも形容詞が一つの独立した語クラスとして認められているのは、属性概念を表す語群が動詞や名詞とは異なった形態・統語論的な振る舞い方をするからである。したがって、名詞型形容詞か動詞型形容詞かという違いの意味は、形容詞の性質のある部分が名詞または動詞と重なっていると捉えた方が合理的である。形容詞の振る舞い方を総体的に捉えるならば、述語成分として機能する際の形容詞の振る舞い方は、形容詞の文法特徴の一つの側面にすぎず、述語としての振る舞い方のみが、形容詞がもつ性質の絶対的かつ決定的な要素ではない¹⁵⁾。動詞や副詞、名詞などの語クラスの認定も形態的、統語的、意味的要素の混合によって成立しているのである。

形容詞の二つの機能に関して、最近では、談話機能という観点から、自然言語における形容詞の機能的優位性は叙述用法にあるとみる見解が、Hopper & Thompson (1984)、Thompson (1988)、Wetzer (1996) などに示されている。これらの論は、次の Wetzer (1996: 291) が述べているように、形容詞の談話における叙述機能が動詞に匹敵すると考えるものである。

Predicate adjectivals are essentially used to predicate a property of an established discourse referent. Since the predicating function in discourse is prototypically associated with the category of Verbs, it seems reasonable to expect that languages will preferably encode adjectival predicates like (intransitive) verbal predicates.

例えば、Thompson (1988) は、動詞型形容詞の中国語と名詞型形容詞の英語を対象として、談話における形容詞の用法を名詞修飾用法と叙述用法との二つに分け、その使用頻度を調べている。Thompson (1988) では、その結果として、会話の中では両言語ともに叙述用法が7割程度の使用頻度を示していることを報告し、動詞型形容詞か名詞型形容詞かに関係なく、談話においては、叙述機能が優位であろうと論じている。Biber et al. (1999) でも同様の調査結果が読みとれる。Biber et al. (1999) では、新聞、学術分野、日常会話等の分野別に分けたコーパス資料（延べ100万語）を用いて、形容詞の名詞修飾用法と叙述用法の使用頻度を調べている。これによると、全体的に名詞修飾の方が叙述用法より多く使われているが、分野別にみるとばらつきがあり、学術分野のような書き言葉になると名詞修飾用法が多く見られるが、会話では叙述用法が増加し、両者がほぼ同程度である (p. 506)。このような調査から窺えるのは、形容詞の使用頻度は書き言葉では名詞修飾機能がより優位で、話し言葉では叙述機能がより優位である可能性がある、ということである。

6. おわりに

以上、形容詞の叙述機能と名詞修飾機能の二つの統語機能に関する学説上、理論上の諸問題を考察した。以上の検討から得た主要な点は、次のとおりである。

- ①形容詞の機能的本質を論じる際に問題になる *be* 動詞の統語的役割は、まず、形容詞文に時制やムード、人称を盛り込むことにありと見た方が妥当である。*be* 動詞の機能を、文を作る判断性と統合力だけに結びつけるのは言語事実を十分に反映したものとはいえない。
- ②叙述機能と名詞修飾機能のどちらかを本質的機能に据え、残り一方をそこから抽出することは、何らかの措置を設けないうり困難である。このような方法は生産的な議論には結びつかず、両者は本質的に異なる文法機能をもつものである。また、どちらの機能を中心にみるのかは、それぞれの考え方によりどちらでも良い、というような単純な問題ではない。
- ③名詞型形容詞か動詞型形容詞かという違いの意味は、形容詞の性質のある部分が名詞または動詞と重なっていると捉えた方が合理的である。形容詞の振る舞い方を総

体的に捉えるならば、述語成分として機能する際の形容詞の振る舞い方は、形容詞の文法特徴の一つの側面にすぎず、述語としての振る舞い方のみが、形容詞がもつ性質の絶対的かつ決定的な要素ではない。

- ④使用頻度に関していえば、書き言葉では名詞修飾用法が、話し言葉では叙述用法がより優位である可能性がある。
- ⑤類型論における形容詞の形態・統語論的な性質は、典型的には名詞と動詞のどちらかに偏る性質をもちながらも、名詞や動詞のプロトタイプにはならないものである。

本稿で考察したのは、形容詞の叙述機能と名詞修飾機能の二つの統語機能を文法上どのように見た方が合理的であるかについて、基本的な考え方を整理したものである。とかく形容詞に関してその本質的機能が取りざたされるのは、形容詞が名詞または動詞と形態・統語的性質を共有することが多いということが一因としてある。しかし、だからといって、形容詞の統語的機能の本質が名詞修飾成分または述語成分になることにある、ということにはならない。

形容詞に関して解明すべき課題は、どちらの機能が本質的ではなく、属性概念の文法的特性が名詞と動詞のどちらかに偏るのはなぜか、そこにはどのような文法的要因が関わっているのか、のような点であろうと思う。日本語には、属性概念を表す語クラスに、いわゆる形容動詞の語群がある。これは、名詞と多くの文法的性質を共通にするものである。日本語は、なぜ、述語になる際に動詞と文法的特性を共通にする形容詞から、名詞的特性をもつ形容動詞を発達させたのか¹⁶⁾。どのような言語内的要因がこれを可能にしたのか、のような点を解明しなければならないだろう。

注

- 1) 本稿でいう形容詞は、語尾が「い」形態で終止するものを指す。
- 2) 尾上 (1999: 113-114)。
- 3) 後述 (5節) するように、形容詞の名詞修飾機能と叙述機能は書き言葉か話し言葉かによって使用頻度に差が出る可能性がある。
- 4) 金銀珠 (2006) 参照。金 (2006) では明治期の形容詞理解における錯綜を大槻文彦が活用認識によって再統合していく過程を論じた。
- 5) 金 (2005, 2006) で述べたように、日本の文法学では、江戸後期の蘭学から明治以降、近代日本文法学が成立してくる過程において、西洋語の形容詞が名詞修飾機能に極端に偏った解釈を受けた。この大きな原因の一つが be 動詞の解釈にある。
- 6) 『現代言語学辞典』(1988: 11)。
- 7) 『言語学大辞典』(1996) の「限定」の項目を参照すると、「主語と述語を文の不可欠の要素とする印欧語のような言語では、この主述関係 (predication) も、広い意味での限定関係である。その場合、述語は主語を限定するといえる。それは、判断の言表である predication は、言語的には、限定にほかならないからである。そこから、古い印欧語で、形容詞を述語とする文においても、形容

詞が主語の名詞と照応することが理解される」とある。

- 8) 「付加」という用語が特に名詞修飾機能と結びつけられがちなのは、ラテン語の格の曲用が名詞修飾用法に豊富であったことが一因としてあるのではないかと考えられる。すなわち、ラテン語の形容詞は名詞修飾用法では主名詞の格変化に従い、主格や対格、奪格などのすべての変化形がある。しかし、叙述用法では、形容詞は主語名詞と一致して主格になるか目的語名詞と一致して対格を取るかのことが多い。したがって、暗記を目的とするのであれば、すべての変化形を網羅する名詞修飾用法を中心に置き、叙述用法は簡略に従うことができる。
- 9) ただし、Swinton (1884) では「predicate Adjective」という項目で、「Iron is hard」を例に、ここにおける「hard」が主語名詞を修飾 (modify) するもので動詞を修飾するものではないと述べ、叙述用法の形容詞が主語名詞を修飾することを明示している (p. 125)。
- 10) Dixon (2004) では言語類型論の観点から形容詞の認定基準を設定し、be 動詞に相当するコンピュータ動詞を介在させるか、自動詞になるかのいずれかの方法で述語になることと、名詞句の中で名詞修飾すること、の2点を挙げている (p. 14-32)。言語的事実として形容詞は名詞修飾と叙述の両方の機能に用いられている。
- 11) これらの語は、「庭に人が多い。」に対する名詞修飾用法が「庭に多い人(いる)」ではなく、「庭に多くの人(いる)」で用いられるように、名詞修飾形は通常、「〜く」形で現れる。
- 12) 連体修飾で形容詞の過去形が現れるためには、特定の条件が必要であるとされる。寺村秀夫 (1984: 104) では、「まだ小さかった太郎は訊いた」のような、その文にとって何らかの意義をもつと考えられる情報を付け加えるための修飾 (非限定修飾) の場合は、過去形が現れることができるという。
- 13) 鈴木重幸 (1972)、西尾寅弥 (1972)、Backhouse (2004) 等。
- 14) Dixon (2004) は、様々な言語の形容詞を調べた結果、ある言語において形容詞が名詞、動詞と多くの特性を共有しているとしても、形容詞——典型的には面積、色、年、価値を表す四つの意味タイプの属性概念——は形態統語的な基礎において、それ自身のカテゴリをもつものであると論じている (2004: 8-28)。Dixon (1977) では「some languages have no adjective class at all.」(p. 20) としていたが、Dixon (2004) では「An adjective class can be recognized for every language.」(p. 12) とし、自らの考えを修正している。
- 15) Wetzler (1992: 235) では、まったく同じデータであるにもかかわらず (Sundanese 語)、adjective の所属に関して二人の著者が異なる結論に到達し、一方は名詞型形容詞とし、一方は動詞型形容詞とする例が紹介されている。
- 16) 形容動詞は、性質・状態を表す語として形容詞を補う役割を帯びて発生したとされる。なぜ、動詞型形容詞から名詞型形容動詞が発生したのかもさることながら、なぜ、動詞型形容詞がその発達を止めたのかも歴史的に解明すべき課題である。これに関しては、日本語の時制体系の変化との関連からの説明を試みた Stassen (1997: 559-565) の興味深い仮説がある。

参考文献

- 尾上圭介 (1999) 「文法を考える 8 述語の種類 (1)」『日本語学』18巻9号 p. 110-117. 明治書院。
- 片岡孝三郎 (1982) 『ロマンス言語学叢書 2 ラテン語文法』朝日出版。
- 川端善明 (1958) 「形容詞文」『国語国文』27巻12号 p. 1-11. 京都大学文学部。
- 川端善明 (1959) 「連体(一)」『国語国文』28巻10号 p. 31-48. 京都大学文学部。
- 金銀珠 (2005) 「連体詞の成立—形容詞、adjective との交渉—」『国語国文学』96号 p. 53-68. 名古屋大学国語国文学会
- 金銀珠 (2006) 「近代文法学における「形容詞」「連体詞」概念の形成について— Adjective から形容詞・

- 連体詞へ—」『日本語の研究』2-2号 p. 123-136. 日本語学会
- 沢田奈保子 (1992) 「名詞の指定性と形容詞の限定性、描写性について—色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析から—」『言語研究』102号 p. 1-16. 日本言語学会.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1984) 「形容詞の働きには何がひそんでいるか」『国文学解釈と教材の研究』29巻6号 p. 99-105.
- 東条義門 (1833) 『和語説略図』
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44. 秀英出版.
- 仁田義雄 (1977) 「形容詞の装定用法—「多イ」をめぐる—」『文芸研究』85号 p. 55-63. 日本文芸研究会.
- 仁田義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『月刊言語』27巻3号 p. 26-35. 大修館書店.
- 町田健 (1997) 「形容詞の意味について」『北大文学部紀要』45巻3号 p. 247-272.
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法 第7巻 形容詞』研究社.
- 北原保雄他編 (1981) 『日本文法事典』有精堂出版.
- 国語学会編 (1955) 『国語学辞典』国語学会.
- 田中春美他編 (1988) 『現代言語学辞典』成美堂.
- 山口明穂・秋本守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院.
- 河野六郎他編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂.
- Backhouse, Anthony E. (2004) Inflected and Uninflected Adjectives in Japanese. In Dixon, R. M. W. ed., *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typology*. 50-73. Oxford University Press.
- Benveniste, Émile. (1966) La phrase nominale. In E. Benveniste, *Problèmes de linguistique general*. 151-167. Paris: Gallimard. (河村正夫他訳 (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房)
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Longman, New York: Longman.
- Bolinger, Dwight. (1967) Adjectives in English: Attribution and Predication. *Lingua* 18: 1-34. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Brown, Goold. (1883) *The First Lines of English Grammar*. New York: W. Wood & Co.
- Dik, Simon C. (1980) *Studies in Functional Grammar*. London: Academic Press.
- Dixon, Robert M. W. (1977) Where Have All the Adjectives Gone? *Studies in Language* 1: 19-80.
- Dixon, Robert M. W. (2004) Adjective Classes in Typological Perspective. In Dixon, R. M. W. ed., *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typology*. 1-49. Oxford University Press.
- Givón, Talmy. (1970) Notes on the Semantic Structure of English Adjectives. *Language* 46: 816-837.
- Givón, Talmy. (1984) *Syntax: A Functional-typological Introduction. volume 1*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Gneuss, Helmut. (1996) *English Language Scholarship: A Survey and Bibliography from the Beginnings to the End of the Nineteenth Century*. Arizona State University, Arizona Center for Medieval & Renaissance Studies.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1984) The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar. *Language* 60: 703-752.
- Jespersen, Otto. (1933) *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Kamp, Hans J. A. W. (1975) Two Theories about Adjectives. In Keenan, Edward L. ed., *Formal Semantics of Natural Language*. 123-155. Cambridge: New York: Melbourne: Cambridge University Press.
- Long, Ralph B. (1961) *The Sentence and its Parts: A Grammar of Contemporary English*. Chicago: The University of Chicago Press.

- Lyons, John. (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- Michael, Ian. (1970) *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800*, Cambridge University Press.
- Montague, Richard. (1970) English as a Formal Language. In Bruno Visentini ed., *Linguaggi nella Società e nella Technica*. 189–223. Milan: Edizione di Comunità.
- Pinneo, Timothy S. (1854) *Pinneo's Primary Grammar of the English Language, for Beginners Revised and Enlarged*. Wilson Hinkle & Co.
- Quackenbos, George P. (1885) *First Book in English Grammar*. Tokio: Rikugokuwan.
- Stassen, Leon. (1997) *Intransitive Predication: Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- Swinton, William. (1884) *New Language Lessons*. New York: Harper & Brothers.
- Thompson, Sandra A. (1988) A Discourse Approach to the Cross-linguistic Category 'Adjective'. In John Hawkins, A. ed., *Explaining Language Universals*. 167–185. Oxford: New York: Blackwell.
- Vendryes, Joseph. (1921) *Le langage : introduction linguistique a l'histoire*. Paris: Renaissance du livre. (藤岡勝二訳 (1938) 『言語学概論—言語研究と歴史—』刀江書院)
- Wetzer, Harrie. (1996) *The Typology of Adjectival Predication*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Zandvoort, Reinard W. (1960) *A Handbook of English Grammar*. London: Longmans.

付記

本稿は名古屋大学大学院文学研究科平成18年度博士学位申請論文の一部に加筆修正を加えたものである。本稿の執筆にあたり、名古屋大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員（英語学）の前澤大樹氏に有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げたい。